

μ 同調 I F T

規 格 表

中心周波数455KC
インピーダンス	...A:70KΩ. B:38KΩ
選択度25db (±10KC)
帯域幅6KC (-3db)
同調容量150PF
耐湿度中心のずれ1KC以内 選択度低下2db以内
寸法20mm角, 高さ48.5mm

トリオ・データー・シート
1963年5月20日初版発行
定価1部送料共16円
東京都目黒区青葉台3丁目6番17号
電話 東京03(464)2611(大代表)
トリオ株式会社
トリオ商事株式会社

TRIO TECHNICAL DATA SHEET No. 50

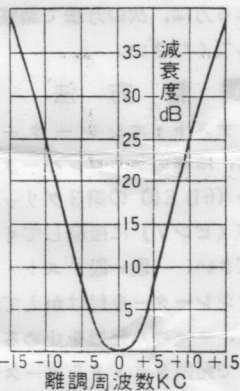
T-26型は、ミニチュア管使用の小型スーパー用として設計された、超小型IFTです。一般に小型IFTは安定度が低いといわれておりましたが、T-26型は、とくに、安定度に留意してあり、水中に浸しても数分で元の特性に戻るまでに防湿に完璧をはかっております。

同封のアダプターを用いますと、市販されているラジオ、およびそのキットのどの孔にも合いますので、保守用としても利用できます。

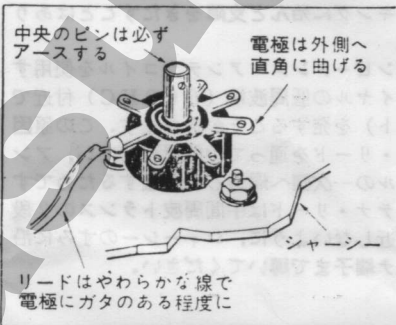
使用上の注意

- 1, T-26型IFTは、6BD6, 6BA6などにマッチいたします。利得は規格表に記されたインピーダンスに、使用真空管のGm(相互コンダクタンス)を乗ずればただちに算出できます。ミニチュア管以外の6D6, 6SK7などに使用することもできます。
- 2, ミニチュア用ソケットの中央のピンは、必ずアースしてください。このアースを忘れると発振いたします。アンテナ・コイルから端子までのリードは、IFTの2段目よりできるだけ遠ざけてください。近接しますと、バリコンの入った方で発振することがあります。ポータブルなどのスペースの狭いもの、止むを得ずIFTを2個並列させることがありますが、発振しやすくなり、最大に感度を上げ得ないことがありますから、なるべく真空管一本を間に入るだけの距離を持たせてください。
- 3, 取り付けは付属のスプリング・ワッシャーにより、完全にシャーシーへビス止めしてください。ケ

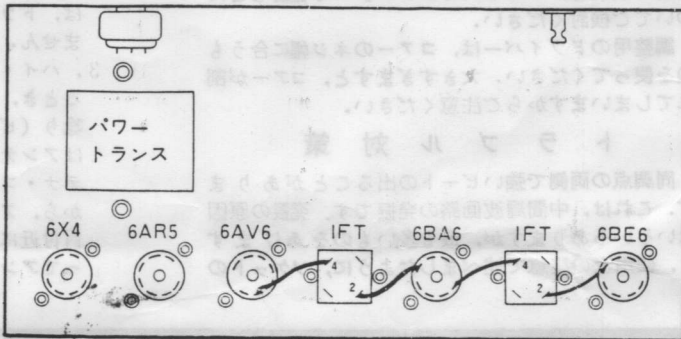
ースのアース不良が原因で発振することがあります。アダプターを使用するときは、まずIFTをアダプターに取りつけてからシャーシーにビス止めしてください。



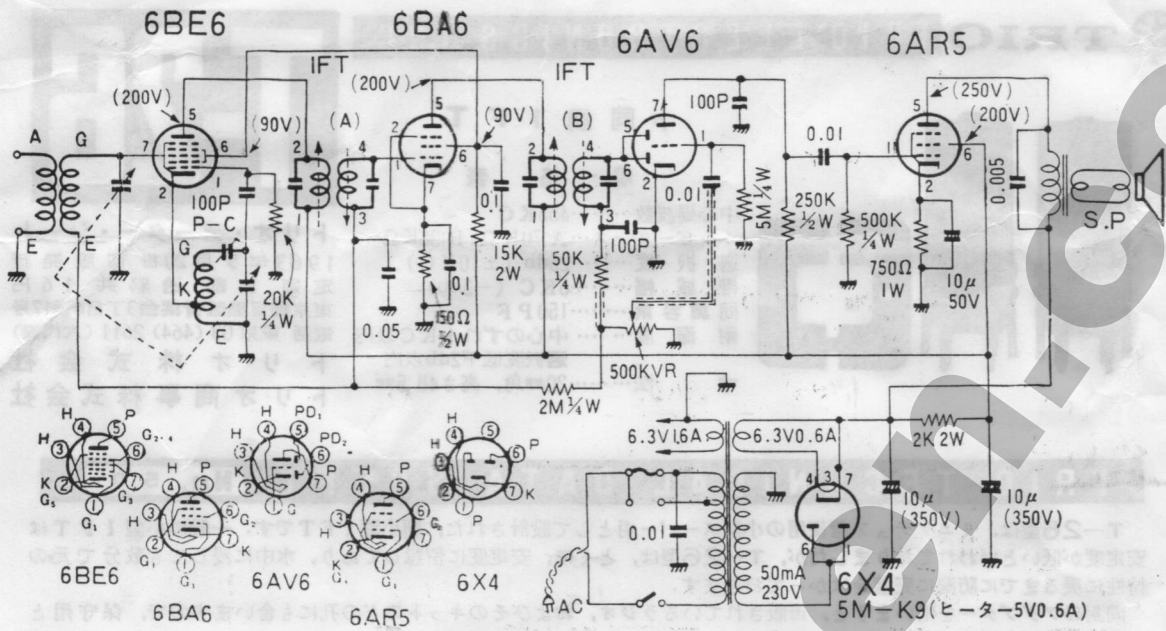
- 4, ミニチュア管のソケットは、電極を外側へ直角に折り曲げ、やわらかなビニール線で配線し、多少電極にガタの生ずるようにしてください。硬い線で配線しますと、真空管にヒビの入ることがあります。
- 5, IFTは必ず調整済になっておりますから、測定器をもっていない方は、ひやみに調整ネジを回さないでください。配線の個人差などによるずれを補正するために、テスト・オシレーターで再調整をさ



■ミニチュア・ソケットの使い方



■真空管とIFTの配置図



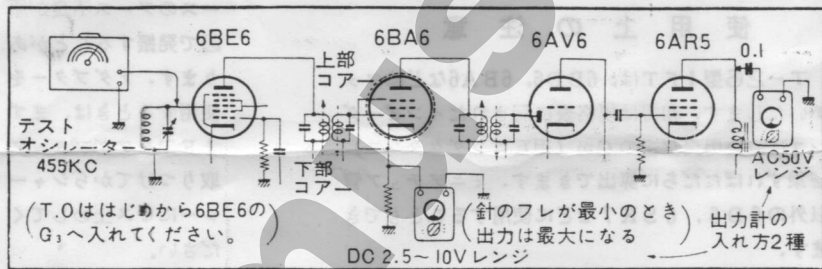
れる方は、次の方法で調整してください。

調整方法

1. テスト・オシレーターは、はじめからコンバーター(6BE6)の第3グリッド(ピン7)に接続してください。一段一段テスト・オシレーターを付けかえて調整する必要はありません。ローカル発振を止めるために、クリップ・コードで発振グリッドをアースしてください。
2. 出力計は出力管のプレートとアース間へ、AC 50~250Vレンジにしたテスターに0.1マイクロのコンデンサーを直列にして接続します。中間周波増幅管のカソード電圧を計り、これの最小値で出力の最大点を知ることができます。
3. 中間周波トランスは、2本とも単峰型ですから上下の調整ネジを回わして、最大出力の点へ固定します。この場合ネジの回転は多くても2回転以内のはずです。2回以上回わさなければ合わないときは、回路の誤配線、テスト・オシレーターの確度などについてご検討ください。
4. 調整用のドライバーは、コアーのネジ幅に合うものを使ってください。大きすぎますと、コアーが割れてしまいますからご注意ください。

トラブル対策

1. 同調点の両側で強いビートの出ることがあります。これは、中間周波回路の発振です。発振の原因はいろいろありますが、最も多いものをあげますと、使用上の注意で述べましたように、ソケットの



中央のアース・ピンを、アースしない場合です。このためグリッド・プレート間の容量が増加して、プレート側の勢力がグリッド側に帰還して発振いたします。

次に多いのは、ソケットの電極を外側へ曲げずに使用した場合で、これもグリッド・プレート間の容量が増加して発振しやすくなります。なおmT管は中間周波増幅管でもシールド・ケースは不要です。

2. 910KCの放送を受けられる地方では、この点でビートが生じますから、このような特殊なところでは、中間周波数は455KCより多少高く、または低くずらせてご使用ください。5KC以内のずれは、トラッキングに殆んど支障をきたすことはありません。
3. ハイ・インピーダンス・アンテナコイルを使用するとき、ダイヤルの低周波端(600KC)付近で唸り(ビート)を発することがあります。この原因はアンテナ・リードを通して中間周波勢力が、アンテナ・コイルの一次側へ帰還して発振するためですから、アンテナ・リードは中間周波トランスの2段目付近に接近しないように、シャーシーのすみに沿ってアンテナ端子まで導いてください。